

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 16 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720087

研究課題名(和文)山東京伝の江戸文化圏解明に関する研究－松前文京の文芸活動について

研究課題名(英文)Research on the Edo cultural area of Santo Kyoden:About the literary work of Matsumae Bunkyo

研究代表者

鹿島 美里(KASHIMA, Misato)

北海道大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：00609068

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：山東京伝の有力な後援者の一人であった松前藩主松前道広の弟、松前文京(俳号泰郷)の俳諧活動を調査・分析し、その俳諧活動を明らかにした。文京(俳号泰郷)は江戸座俳諧宗匠存義を師とし、弟の松前武広(俳号李井)とともに、大名子弟の俳人柳沢米翁・本多清秋・松平雪川・酒井抱一らと俳諧交友を行っていたことを解明した。これによって文京の江戸座俳諧活動が明らかとなり、山東京伝の係わった江戸文化圏の一端を解明することができた。

研究成果の概要(英文)：This research examined and analyzed the haiku works of Matsumae Bunkyo (Haigo Taikyo), the younger brother of the Matsumae Domain leader Matsumae Michihiro, and one of the influential patrons of Santo Kyoden, shedding light on those haiku works. Bunkyo (Haigo Taikyo) was disciple to Edoza haiku master Zongi, and with his younger brother Matsumae Takehiro (Haigo Risei), the research made clear that through haikus he associated with daimyo children Haijin Yanagisawa Beio, Honda Seishu, Matsudaira Sessen, and Sakai Hoitsu. This shed light on the Edoza haiku works of Bunkyo, clarifying part of the Edo cultural area in which Santo Kyoden was involved.

研究分野：人文学

キーワード：近世文学 江戸座俳諧 松前文京 山東京伝 泰郷

1. 研究開始当初の背景

江戸の地を中心に起こった戯作の代表的作者である山東京伝は、江戸後期の近世文学を考える上でも重要な人物といえる。その山東京伝作品に最も影響を与えたのは、江戸の吉原文化であり、吉原文化そのものが江戸文化圏の基盤を形成していたといえる。しかし吉原文化の詳細については、解明しなければならない事項が多く残されているのが現状である。そこで吉原文化を追究してゆくことによって、山東京伝作品の精確な読解や登場人物の解明を行うことが可能となり、近世文学を読解する上で重要な基盤研究になると考えた。

この吉原文化の一つが大名を後援者とする江戸座俳諧である。岩田秀行氏によって「江戸文化の考察において、江戸座宗匠が武家や諸大名と係わって俳諧を中心とした交友関係から、さまざまな江戸文化が芽生えたことにこそもっとも注意が払われるべき」（『江戸学事典』、弘文堂、1984）と、俳諧交友から生まれた江戸文化考察の重要性が従来から指摘されている。しかし江戸文化を形成した江戸座俳諧宗匠と大名の俳諧交友の研究が十分に進んでいない。

そのため本研究では、山東京伝と深い繋がりを持っていた大名子弟の松前藩主松前道広の弟、松前文京（俳号泰郷）の文芸活動を解明する必要があると考えた。松前文京は、江戸後期の戯作界や吉原で有名な通人であり、京伝との係わりにおいては、洒落本・黄表紙作品の数種に序を与えるなど、京伝の有力なパトロンの一入である。吉原遊女七代目瀬川を身請けしたことでも有名な人物であり、吉原文化を牽引していた存在であった。さらに文京は江戸座俳諧宗匠の存義と関係があり、弟松前武広も俳諧を嗜んでいた。しかし、その俳諧活動はいまだ明らかにされていない。

そこで研究代表者は本研究を遂行する以前に、山東京伝の洒落本『通言総籙』に登場する点取俳諧を行う人物を中心として、吉原文化と江戸座俳諧の係わりについて解明している。ここでは京伝が江戸座俳諧と深い係わりを持ち、吉原仲の町茶屋主人や大名子弟とともに吉原における俳諧文化の一端を担っていたことを明らかにした。（『通言総籙』をめぐって江戸座俳諧 石原徒流と吉原仲の町茶屋主人の俳諧活動、『国語国文研究』、129号、2006）。次いで京伝の後援者の一人であり、京伝作品にも登場して大きな影響を与えた松江藩主松平治郷の弟、松平雪川の俳諧活動について解明した。雪川の俳諧活動は伊勢神戸藩主本多清秋など大名子弟とともに、江戸座俳諧の宗匠である一世旨原門の人々と吉原や深川を中心とした交流が行われていたことを論じた。（「松平雪川と江戸座俳諧 一世・二世との係わりを中心として」、『国語国文』79巻2号（通巻906号、2010）。

以上の研究成果に見られるよう、吉原という場所は、単なる遊興の場としての機能だけでなく、同時に江戸文化圏も生み出す場所として機能していたことが明らかとなった。そのため、吉原を中心とした江戸文化圏の解明を行うことは山東京伝作品の解明だけに止まらず、江戸後期文学を解明する課題であることを指摘した。

2. 研究の目的

（1）本研究では、上記の背景およびこれまでの研究成果をもとに、吉原文化の一つが大名子弟をパトロンとする江戸座俳諧であることから、松平雪川とともに山東京伝と深い繋がりを持っていた大名子弟の松前藩主松前道広の弟、松前文京（俳号泰郷）の俳諧活動について調査・分析し、山東京伝をめぐる江戸文化圏の解明を段階的に行うことを目的とした。そして大名子弟をパトロンとした江戸座俳諧活動について山東京伝の戯作の側から研究を進めてゆくこととする。

（2）具体的には、松前文京（俳号泰郷）の文芸活動のうち、泰郷の俳諧活動を調査・分析し、データベース化する。泰郷が入集する俳書の書誌情報・入集者の入力・俳書の内容分析を行い、泰郷の兄弟や江戸座俳諧宗匠、大名子弟との俳諧交友関係を分析する。この結果から得られたデータをもとに、松前泰郷の俳諧交友を江戸座俳諧との係わりの中で位置づける。

3. 研究の方法

（1）松前泰郷が入集すると検討した俳書150点余りを採録して、マイクロフィッシュ、原資料にあたり資料調査を行った。採録は泰郷と係わりがあったと考えられる江戸座俳諧宗匠存義を中心に、秀国・菊堂・鶏口・泰里・樓川らの俳書を調査した。また泰郷の弟松前武広（俳号李井）が入集する俳書の調査・分析を行った。さらに泰郷と係わりの深い大名子弟の俳人柳沢米翁・松平雪川・酒井抱一・本多清秋らの関係した俳書の調査を行った。この調査から松前泰郷が入集する俳書の刊年、書名、編者、俳書の形態、序跋の執筆者、所蔵先、書誌情報、俳書の内容、俳書の入集者を一覧にしてデータベース化を行った。調査は天理大学附属天理図書館・公益財団法人柿衛文庫・西尾市岩瀬文庫・県立長野図書館・広島大学図書館・国文学研究資料館等で行った。そして、俳書の編纂者と俳書の序文・跋文から俳書の成立経緯を分析し、泰郷に関する資料の翻刻・読解を行った。

（2）泰郷が入集する俳書から、泰郷と弟松前李井との関係、江戸座俳諧宗匠との関係、大名子弟との俳諧活動を精査することによって、文京の俳諧交友関係をまとめた。これ

によって泰郷の江戸座俳諧における位置づけを検討した。

4. 研究成果

(1) 松前文京(泰郷)が入集する俳書を調査し、データベース化を行った。これにより、泰郷の俳諧活動を明らかにした。

まず、泰郷と江戸座俳諧宗匠との俳諧交友関係を解明した。泰郷が存義追善集『いとしくれ』で存義の別号「有無庵」の二世を名乗っており、弟李井は存義追善集『冬木立』で存義から号の一つである「李井」を譲られていたことから、二人の俳諧宗匠が存義であることが判明した。さらに存義亡き後は、存義側江戸座俳諧宗匠秀国の下で俳諧活動を行ってきたことが、『石寿観秀国古希賀集』など秀国が係わった俳書から明らかとなった。泰郷が入集する秀国の俳書の序文を大名俳人の大和郡山藩主柳沢米翁が寄せていることから、秀国と米翁に深い繋がりがあったのである。また秀国編『俳諧尚齒会』から、秀国の生年が判明した。さらに泰郷と同時代の大名俳人松代藩主真田幸弘(俳号菊貫)が親しく交友していた存義門の江戸座俳諧宗匠菊堂が入集する俳書に泰郷も多く入集しており、菊堂と泰郷の俳諧交友が見られたのである。菊堂編纂の『妙智力』は二世亀成となった菊堂が一世亀成の追善を営んだ集で、存義が序文を寄せ、泰郷はじめ、大和郡山藩主柳沢米翁・松代藩主菊貫・松江藩主弟末白、江戸座俳諧宗匠秀国らが入集する俳書であり、大名子弟と俳諧宗匠の交友関係が明確となる俳書であることが確認できた。これら分析を行った存義や秀国・菊堂らが編纂した俳書は、彼ら俳諧宗匠が泰郷や米翁をはじめとする大名子弟から句を乞うという関係にあったと言える。つまり江戸座俳諧は江戸座俳諧宗匠の下で大名子弟を後ろ楯として行われており、両者の関係は密接であった。しかし、江戸座俳諧宗匠についてはその活動が明らかにされていない人物が多い。そのため本研究で、泰郷と係わりのあった存義・秀国・菊堂ら江戸座俳諧宗匠の俳諧活動の一部を明らかとした。その結果、江戸座俳諧宗匠の俳諧活動を段階的に解明する成果となった。

(2) 次に、泰郷と大名子弟の俳諧交友関係を解明した。泰郷の俳諧活動は江戸座俳諧宗匠とともに、大名子弟との俳諧交友によって行われていた。そのうち泰郷は大和郡山藩主柳沢米翁、姫路藩主酒井忠以弟酒井抱一、松江藩主松平治郷弟松平雪川・末白、伊勢神戸藩主本多清秋との親密な俳諧交流が認められた。

柳沢米翁は当時の大名俳諧を牽引していた存在であった。この米翁の『松鶴日記』では寛政二年に、酒井抱一の屋敷で泰郷・米翁・抱一・末白ら大名子弟と佐藤晩得といった江戸座俳諧宗匠が句会を行ったことが記

されており、泰郷が中心的な大名俳諧に係わっていたことの証左となった。また、酒井抱一と泰郷の繋がりは、二人が山東京伝の有力な後援者であり、その交友関係も俳諧がもとになっていることを確認した。『俳諧国づくし』や秀国編『俳諧秋の寝覚』では、抱一は泰郷・李井・米翁・雪川・末白らと入集し、泰郷と抱一は安永・寛政頃には俳諧によって密接に繋がっていたことを明らかとした。さらに泰郷、抱一と並んで京伝の重要な後援者であった松平雪川とも、泰郷は多くの俳書とともに句作する関係にあったことが検証できた。雪川が係わった俳書『名あらため集』、『十三仏』、『ある日』、『俳諧秋の寝覚』などに泰郷が入集するが、雪川の俳諧宗匠が一世・二世旨原だったことから、旨原と係わりのある俳書に入集していたのである。さらにこれらの俳書には雪川と三十年来の親交がある伊勢神戸藩主本多清秋が入集するが、これも清秋が一世旨原門だったことによるものであった。これにより、雪川・清秋と泰郷の俳諧交友は旨原門との係わりの中で行われていたのである。そして、雪川の弟末白も泰郷とともに入集し、雪川の兄の松江藩主松平治郷(俳号雪羽)とともに三兄弟で俳諧に係わっていたのである。これら泰郷と大名子弟との交友関係の解明は、今後の大名俳諧研究に発展をもたらすものとなった。

(3) 泰郷の弟、松前武広(俳号李井)の俳諧交友関係を明らかにした。李井は柳沢米翁と密接な関係にあったが、それは秋田藩江戸留守居役を退任後、江戸座俳諧宗匠となった佐藤晩得の句を李井が米翁へ送る役目を果たしていたことによるものであった。さらに晩得の句を李井が抱一に廻達することも米翁の日記にしばしば見られた。李井が晩得の牛島近くに住んでいたことから、交流が盛んになったと考えられる。さらに晩得は京伝の黄表紙に朝四大尽などとして登場する人物であった。また、晩得と同じ秋田藩留守居役の月成も泰郷や李井が係わった俳書に入集しており、加えて月成は、京伝と同時代の戯作者朋誠堂喜三二でもあった。月成は晩得に師事した後、菊堂に師事していたことも俳諧交友を考える上で注目すべき点である。さらに泰郷や晩得が入集した俳書には、吉原関係者の名前が見られたのである。そのため、吉原関係者とともに晩得・月成といった京伝と深い繋がりを持つ人物が江戸座俳諧に係わることによって、吉原を中心に戯作を生み出す原動力となったことを指摘した。上記(1)~(3)の研究成果を「松前文京(俳号泰郷)の俳諧活動」として論文にまとめ、投稿発表を決定している。本研究での松前泰郷の俳諧活動の調査・分析によって、当時の江戸座俳諧宗匠と大名俳人の交友関係の一端を明らかにすることができた。そして泰郷を山東京伝の後援者である大名子弟俳人としての立場から考察したことによって、戯作界と江戸

座俳諧を結びつける成果となり、俳諧交友が江戸文化を生み出す重要な要因であることの明証となった。本研究により山東京伝の係わった江戸文化圏解明のための基盤研究の一部が確立でき、今後の江戸文化、江戸座俳諧研究に寄与するものとなった。さらに今後の展望として、引き続き江戸文化圏の解明には、京伝と繋がりのある大名俳人の交友関係の調査を行うことが必要であり、その成果を発表してゆくことを課題とする。

(4)山東京伝作品に係わる成果として、『山東京伝全集 10・合巻5』(ペリかん社、2014)の『妹背山長柄文台』・『薄雲猫旧話』、『山東京伝全集 11・合巻6』(ペリかん社、2015)の『重井筒娘千代能』の翻刻を担当した。『薄雲猫旧話』の角書には「焦尾琴調子伝」とあり、其角の『焦尾琴』から書名を取り、作品中にも『焦尾琴』をはじめとする其角の句が用いられていた。また、『薄雲猫旧話』にも其角の句が引用され、他の合巻にもこれを認める。江戸座は其角の洒落風を継承発展させた座側である。そのため本研究での泰郷の俳諧交友の分析と京伝が作品中に用いた其角の句の多用、京伝自身も作中で句作を行っていることから、江戸座俳諧が京伝作品に与えた影響を認めることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計3件)

水野稔、鈴木重三、清水正男、本田康雄、延広真治、徳田武、棚橋正博編、清水正男、井原幸子、鹿島美里、神田正行、永田和也、深谷大翻刻担当、ペリかん社、『山東京伝全集 11・合巻6』2015、『重井筒娘千代能』pp157-206

水野稔、鈴木重三、清水正男、本田康雄、延広真治、徳田武、棚橋正博編、清水正男、鹿島美里、神田正行、長泉文人、深谷大翻刻担当、ペリかん社、『山東京伝全集 10・合巻5』、2014、『妹背山長柄文台』pp213-258、『薄雲猫旧話』pp357-403

久保田淳・長島弘明編、鹿島美里他著、明治書院、『日本名歌・名句大事典』、2012、乙二(pp. 57-58、119、165、342、322、342)・宗瑞(pp. 21、101、171、245)・素外(pp. 141-142、217、690)素檠(pp. 26、51-52、370)・鳥酔(pp. 207、283、353)・野逸(pp. 46-47、196、276)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

鹿島 美里(KASHIMA, Misato)
北海道大学・文学研究科・専門研究員
研究者番号：00609068